

英語の多様性とグローバル人材の習得英語について

五十嵐優子(立命館大学)

1. はじめに

文部科学省は、現在、国際社会で活躍できるグローバル人材の育成を目標の一つとして英語教育を実施しているが、ここから国際社会で使用されている言語は「英語」であると文科省は認識し、日本人がそこで活躍していくためには十分な英語力が必要であると考えていることが分かる。ところが「英語」と言ってもそれには様々な変種が存在し、それぞれが独自の言語学的特徴をもっている。そして各変種は多くの話者にとって自分たちのアイデンティティを形成するための重要な構成要素の一つとなっている。Kachru (1985)は多様な英語を Inner Circle varieties (イギリス, アメリカ, カナダ, オーストラリア, ニュージーランドの英語), Outer Circle varieties (Inner Circle 国の植民地だった国の英語), Expanding Circle varieties (上記に含まれない国の英語) に区分けしたが、日本人を含めた多くの外国人英語学習者は Inner Circle の英語を習得目標としている。しかしながら、国際ビジネス等で使用される共通語としての英語は、必ずしも Inner Circle の英語とは限らない (末延, 2010)。もちろん英語母語話者同士の会話では Inner Circle のものが使用されているが、非英語母語話者同士の会話では Inner Circle の英語にはない特徴を持った英語が使用されている (末延, 2010; Pedrazzini & Nava, 2010)。このような国際社会での英語使用状況から、日本人大学生が文科省や日本のビジネス界が期待しているような国際社会で活躍するグローバル人材となるには、様々な英語に対応できる能力を身につける必要がでてくる。また英語教育では、多様な英語の中で日本人が習得目標とするべき英語とはどのようなものなのかも考えなければならない問題となってくる。

そこで筆者は、日本の大学生が、将来グローバル人材となるには多様な英語に対応できる能力を身につける必要があり、様々な英語を実際に学びたいと考えているのかを調査するため、2018年にアンケートによるパイロット・スタディを実施した。本稿ではこの調査結果を紹介し、これを踏まえて大学生が国際社会で必要となる多様な英語に対応できる能力を養えるよう英語教育においてどのような英語を習得目標とするべきなのかを考察していく。

2. グローバル人材のための習得目標となる英語

今日のEFL学習者用教科書に使用されている英語はアメリカ英語かイギリス英語である (久保田, 2018)。しかしながら、国際社会では様々な背景を持った話し手により多様な英語が使用されていることから、アメリカ英語/イギリス英語並びにその他の Inner Circle の英語を学習者の習得目標とすることに異議を唱える研究者や教育者が増加してきている。例えば Canagarajah (2007)は、「Inner Circle の英語を学習者の習得目標とするのではなく、世界で話されている様々な英語と英語使用者の多様性に適応できる能力を養う教育をする必要がある」と主張している。では Inner Circle の英語以外で日本人がグローバル人材となるために習得すべき英語の選択肢としてはどのようなものがあるのだろうか。

まず単純に候補として挙げられるのは Outer/Expanding Circle の英語であるが、ある特定の地域の英語を選択した場合、その英語にステータスが与えられ、他の英語は劣ったものという見方が人々に新たに生まれてくる可能性がある。現にこのような態度は日本の社会において確認できる。日本人の多くは英語圏の中流階級に属する白人が使用する英語をモデルとみなす英語母語話者中心主義を持っているが (Kubota, 1998)、これは言い換えると日本人が Inner Circle の英語を習得目標と認識しステータスを持ったものとして受け取り、その一方で他の英語には無関心な態度を取っていることを示している。そして自分たちの使う英語に対しても自信を持つことが出来ず、更に Inner Circle の英語と比較して劣ったものとする英語学習者も存在する (藤原, 2013)。よって、日本人にとっては特定の国や地域に属さない英語を習得目標と設定することが適していると言え、その候補としてグローバルな視点から生まれてきた変種である English as a lingua franca (ELF) と English as an international language (EIL) が挙げられる。

English as a lingua franca (ELF)は、基本的に非英語母語話者同士の会話で使用される英語変種を指すが、最近では英語母語話者と非英語母語話者との会話で使用される英語も ELF と見る場合もある (Ur, 2010)。ELFは、元々英語学習者

の習得目標となるように考えられたものではなく (Jenkins, 2006), 英語を既に習得している話し手が使用するそれぞれの母語からの影響がある多様な形態をもった変種と理解されている (Canagarajah, 2007; Meierkord, 2004).

English as an international language (EIL) は国際社会で使用されている特定の国や文化とは関連のないニュートラルな英語であるため, どの国の英語としても機能することができるもので, ELF と同様に非英語母語話者が使用する英語と理解されており (McKay, 2018), EIL を ELF と同じものとして扱う研究者(例えば, Kirkpatrick や Rubby & Saraceni 等) もいる (Maley, 2010). EIL は英語学習者の習得目標となる英語と位置付けられており, EIL 習得のための授業では他国の文化を学んで「自分と異なること」に敬意を払い, 同時に自分たちの文化に対する理解を深めることも目標としている (McKay, 2018).

上記のことから, グローバル人材として国際社会で活躍したいと考える日本人が習得目標とするべき英語は EIL が適していると言える. しかしながら, EIL は「国際社会で使用される言語」という概念であり, 現時点では言語学的な特徴(文法, 音声, 語彙等)を持っていない実態のないものであることから, 英語教師は EIL の考え方に理解を示すがこれを習得目標とはせず, むしろ目標となる言語形態が明確なアメリカ英語/イギリス英語を英語学習者の習得目標としている場合が多い (Dogancay-Aktuna & Hardman, 2018).

3. 調査対象者と調査方法

本調査は, パイロット・スタディとして 2018 年に筆者が勤務する大学の 1 年生 39 名を対象にアンケートを実施した. 調査被験者は全員 intermediate レベル (TOEFL ITP 440-480) のクラスに属している. アンケートの質問事項は下記の 4 つである.

- (1) グローバル人材として英語を使って国際社会で活躍したいか.
- (2) 日本人は多様な英語に対応できる能力を持つ必要があると思うか.
- (3) アメリカ英語とイギリス英語以外でどのような英語を聞いたり読んだりしたことがあるか. それらを理解できたか.
- (4) 英語の教科書に様々な英語の言語学的特徴(語彙, 文法, 発音)の説明を掲載するべきか.

質問(1)(2)(4)は「はい」「いいえ」で回答するもので, 質問(3)は英語の変種名を挙げた後, 理解できたかどうかを「はい」「いいえ」で回答するものとなっている. 被験者はオンライン上のアンケートに日本語で回答し, 彼らの回答は全て自動的にオンライン上に集計された.

4. 調査結果

まず最初の質問である「グローバル人材として英語を使って国際社会で活躍したいか」に対しては, 79%の被験者が「はい」と回答しており, 「いいえ」と回答した 5%と「わからない」と回答した 16%よりも遥かに多くの被験者がグローバル人材を目指していることが示された.

次に「日本人は多様な英語に対応できる能力を持つ必要があると思うか」を尋ねたが, 84%の調査被験者が「はい」と回答したのに対し, 「いいえ」が 11%「わからない」が 5%という回答を得た. このことから, 被験者は, 国際社会で活躍するには多様な英語に対応できる能力が必要だと認識していることが分かる.

三つ目の質問は「アメリカ英語/イギリス英語以外の英語でどのような英語を聞いたり読んだりしたか」で, 被験者にはその英語の変種名を挙げてもらった. 下記の表はその結果である.

表1 アメリカ英語とイギリス英語以外で聞いたり読んだりした英語

Inner Circle varieties	オーストラリア, ニュージーランド, カナダ
Outer Circle varieties	インド, フィリピン, アフリカ, シンガポール
Expanding Circle varieties	アフリカ, 韓国や中国を含むアジア, ヨーロッパ, 中東

表1が示すように, 被験者はInner Circleの英語のみならず, Outer/Expanding Circlesの英語を挙げていることから, 彼らは実際にアメリカ英語/イギリス英語以外の英語に遭遇しており, これらの英語の存在を認識していることが分

かる。被験者は、日本の学校教育でアメリカ英語／イギリス英語の教科書を使用して英語を6年以上学んできているが、これ以外の英語に出会う機会としては、最近では教科書でも多様な英語を扱っているが、教科書以外からのケースもあり、その出会いの例としてAssistant Language Teacher (ALT) の存在が挙げられる。Japan Exchange and Teaching Programme (2019) のデータによると、大多数のALTはInner Circle国の出身であるが、Outer Circleの英語を話す国から採用されたALTもいることが示されている。また被験者はExpanding Circleの英語も挙げていることから、彼らは教科書やALT以外からも英語に触れており、地域や個人レベルでの国際交流や報道・広告・テレビ番組・映画・音楽等により様々な英語に遭遇していると考えられる。

またアメリカ英語／イギリス英語以外の変種を聞いたり読んだりした時にそれらを理解できたかどうかを尋ねたが、41%の被験者がアメリカ英語／イギリス英語以外の英語を理解できなかったと回答し、「理解できた」と回答した32%と「覚えていない」と回答した27%の被験者よりもわずかならが多いことが分かった。

最後に「英語の教科書に様々な英語の言語学的特徴（語彙、文法、発音）の説明を掲載すべきかどうか」を尋ねた。被験者の82%は多様な英語の特徴をEFL教科書に掲載すべきだと考えており、この割合は「いいえ」の10%と「わからない」の8%と回答した被験者よりも極めて多く、大多数の被験者が教科書にアメリカ英語／イギリス英語以外の英語の言語学的特徴を紹介すべきだと考えていることが分かった。この結果は、被験者が様々な英語を教科書で学びたいと考えていることを示していると言える。

5. 考察

本調査の結果から、被験者の多くは英語を使って国際社会で活躍したいと考えており、英語の多様性に対応できる能力を持っている必要があると認識していることも明らかになった。また、被験者は自分たちが学校で学んできた英語とは異なる英語に実際に遭遇し、その英語を理解できなかった経験をしているが、この経験が被験者に国際社会で活躍していくにはアメリカ英語／イギリス英語以外の英語を理解できる能力が必要であることを認識させ、学校教育で使用されていない英語も教科書で学びたいと思うようになり、多様な英語を教科書に掲載すべきだと考えさせたと推察できる。これらを踏まえて、習得目標となる英語をここで考察していく。

現在、日本のEFL教科書はアメリカ英語／イギリス英語で書かれている。これは習得目標もこれらの英語であることを示しているが、一般的に言って日本人は英語母語話者中心主義を持っているため、Inner Circleの英語を習得目標とした場合、英語と英語話者の多様性に敬意を払わなくなり、またInner Circle以外の文化や人々を尊重するという考えも持ちにくくなってしまいが、このような態度は多様な背景を持った英語話者とコミュニケーションを図っていくには不都合なものとなる。国際社会で多様な英語話者とうまくコミュニケーションを図っていくには、彼らの使う英語と彼らの文化に敬意を払うことが重要で、自分たちとは異なることを認識しそれを尊重する必要がある (McKay, 2018)。よって、Inner Circleの英語を習得目標とするのは、日本人をグローバル人材とするには不適切ということになる。そこで本稿では、基本的にはMcKay (2002) が示しているような国際社会で通用するどこの国の文化にも属さないニュートラルなEILを習得目標として提案するが、この英語は架空のもので、現実には存在していないため、実際に日本人大学生の習得目標となるものを考えていく。

Hino (2012) は英語に精通している日本人の英語教員が使用している英語を習得目標として提案している。またHonna & Takeshita (2014) は、日本の教育機関において今までと同様にアメリカ英語／イギリス英語を使って日本人を教育していくが、アメリカ人やイギリス人が使う英語ではなく、日本人独自の発音や表現を持ったアメリカ英語／イギリス英語とは異なる特徴をもった英語が使えることを習得目標としている。そこで本稿では上記の考え方に倣って「国際社会で実際に活躍している英語に堪能な日本人が使っている英語」、言い換えると「日本人であることが分かる特徴を持った国際社会で通用している英語」を習得目標として提案する。これは、アメリカ英語／イギリス英語による教育を受けた日本人が使う日本語からの影響が見られるEILであって、英語母語話者の英語とは異なるものである。

グローバル人材を目指す日本人学生に本稿が提案している英語を身につけもらうため、教育機関では英語の言語学的特徴を習得するための手段としてアメリカ英語／イギリス英語を使って教育していく。そしてそこで重要となる点は、学生に英語母語話者中心主義を持たせないよう注意深く教えていくことである。英語母語話者中心主義の考え方は人々に非英語母語話者の英語は正当ではないという考えを持たせる要因の一つとなっており、非英語母語話者の英語に対する差別や非英語母語話者である自分たちが使う英語への劣等感を生み出すことにもつながっている。

Yamada (2010) は1981年から2010年までに使用された中学生用英語教科書の内容調査を実施し、そこで1990年代以降はアジアやヨーロッパに関連する内容も取り上げられるようになったが、一貫してアメリカに関する内容が教科書に多

く使用されていることを示した。従って、グローバル人材育成のための英語教育ではアメリカ英語/イギリス英語を使って学生を教育していくが、これらの文化に重点を置く教育を実施するのではなく、Outer/Expanding Circle の内容の割合を増やし、英語母語話者中心主義を学生の心に植え付けないようにしていくことが必要となる。また多様な英語の特徴を教科書に載せて、英語の多様性に対する学習者の知識と認識を高めることも重要である。これはCanagarajah (2007)が主張している「英語圏の英語を学習者の習得ターゲットとするのではなく、世界で話されている様々な英語と英語使用者の多様性に適応できる能力を養う教育をする」という考え方にも合致していることから、このような教育が日本では必要となっているのではないだろうか。

参考文献

- Canagarajah, S. (2007). Lingua franca English, multilingual communities, and language acquisition. *The Modern Language Journal*, 91(Focus Issue), 923-939.
- Dogancay-Aktuna, S., & Hardman, J. (2018). Teaching of English as an international language in various contexts: Nothing is as practical as good theory. *RELC Journal*, 49(1), 74-87.
- 藤原愛 (2013). 日本人英語学習者の発音習得に対するピリーフ 育英短期大学研究紀要, 30, 37-46
- Hino, N. (2012). Negotiating indigenous values with Anglo-American cultures in ELT in Japan: A case of EIL philosophy in the Expanding Circle. In A. Kirkpatrick & R. Sussex (Eds.), *English as an international language in Asia: Implications for language education*, (pp.157-173). Springer.
- Honna, N., & Takeshima, Y. (2014). English as an international language and three challenging issues in English language teaching in Japan. In R. Marlina & R. A. Giri (Eds.), *The pedagogy of English as an international language: Perspectives from scholars, teachers, and students* (pp.65-7). Springer.
- Japan Exchange and Teaching Programme (JET) (2019). JET プログラム参加者数. 2019年8月16日
<http://jetprogramme.org/ja/countries/>
- Jenkins, J. (2006). Current perspectives on teaching World Englishes and English as a lingua franca. *TESOL Quarterly*, 40(1), 157-181.
- Kachru, B. B. (1985). Standards, codification, and sociolinguistic realm: The English language in the outer circle. In R. Quirk & H. Widdowson (Eds.), *English in the world* (pp.11-30). Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Kubota, R. (1998). Ideologies of English in Japan. *World Englishes*, 17(3). 295-306.
- 久保田竜子 (2018). 英語教育幻想 ちくま書房
- Maley, A. (2010). The reality of EIL and the myth of ELF. In C. Gagliardi & A. Maley (Eds.), *EIL, ELF, Global English: Teaching and Learning Issues* (pp.25-44). Bern, Switzerland: Peter Lang.
- McKay, S. L. (2002). *Teaching English as an international language: Rethinking goals and approaches*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- McKay, S. L. (2018). English as an international language: What it is and what it means for pedagogy. *RELC Journal*, 49(1), 9-23.
- Meierkord, C. (2004). Syntactic variation in interactions across international Englishes. *English World-Wide*, 25, 109-132.
- Pedrazzini, L., & Nava, A. (2010). The ELF of English language teachers. In C. Gagliardi & A. Maley (Eds.), *EIL, ELF, Global English: Teaching and Learning Issues* (pp.283-300). Bern, Switzerland: Peter Lang.
- 末延岑生 (2010) 『二ホン英語は世界で通じる』東京, 平凡社
- Ur, P. (2010). English as a lingua franca: A teacher's perspective. *Cadernos de Letras*, 27, 85-92. Retrieved from http://www.letras.ufrj.br/anglo_germanicas/cadernos/numeros/122010/textos/c1301220100penny.pdf
- Yamada, M. (2010). English as a multicultural language: Implications from a study of Japan's junior high schools' English language textbooks. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 31(5), 491-506.